報告

# 大学と地域をつなぐ、「角間の里山」から加賀・能登の里山へ

中村　浩二

皆さん、こんにちは。金沢大学の中村でございます。本日は大変な大雪の中、多数おいでいただきまして、本当にうれしく思っております。私は数日前に京都にいましたので、きょうは京都はかんかん照りでいい天気だとよく知っております。本当に対照的な天気ですが、両校が一緒にシンポをひらけることを大変うれしく思っています。まず私たちの角間の里山自然学校の活動ということで、里山メイトのお一人である八田建さんが編集されたビデオをご覧いただきたいと思います。では、どうぞよろしくお願いします。

**【VTR】（カラーページpp.19〜20参照）**

では、ビデオが終わりましたので、角間の里山自然学校についてもう少し紹介したいと思います。ビデオにありましたように、大変楽しそうに子供だけではなく、大人も里山で遊んでいます。先ほど河合先生のご講演で、森と遊ぶということ、自然と直接触れるということは非常に大事だというお話がございました。先ほど、江南先生は森と触れ合うことによって、森に教えてもらう、森に癒しをもらうと話されました。金沢大学は幸いに非常に大きな里山ゾーンを持っておりまして、そこには山だけではなく、棚田もあります。そういう所を使って、1996年からもう今年で丸6年活動が終わりました。たくさんの子供たちが来たり、90歳のおばあちゃんも入ったいろいろな活動が広がっています。里山メイトという大変熱心なリピーターがもうすでに400人から500人近くもおられて、今日もたくさんきておられます。私たち、大学側が何も言わなくても、どんどん自分たちで棚田の田植えをされたり、竹林の整備をされたりということが進んでい

ます。

金沢大学では幸い石川県とも金沢市とも、いろいろな民間団体とも、強い連携のもとに活動が進んでいますが、同時に、大学は教育とか研究にも里山ゾーンを使っております。この春から私たちの里山自然学校は、第2フェーズに入ったと私は理解しており、今日は主にその話をしたいと思っています。それは何かと言いますと、4月に石川県の（当時の）白峰村から寄贈された、先ほどもビデオに映っていましたが、「角間の里」という巨大な民家（築300年）を出来るだけ原型を保存して、そのまま移築しました。そこを拠点として、いろいろな活動を始めています。その「角間の里」という大変すばらしい施設を使って、これまで6年間、「角間の里山自然学校」が育ててきた地域の方々との連携をさらに深めて、さらに広めてゆきたいと思っております。金沢大学には里山ゾーンという70ヘクタールのすぐれた山があって、非常に自然に恵まれています。カモシカもときどき出てきますし、クマさえも出てきたり、ホタルの群れがいます。哺乳類が15、6種類もいる非常に恵まれた自然があります。これは1つのハードでありまして、「角間の里」という建物もハードです。そこで大事なのは、どんな風に交流して、大学も市民もお互いに学びあうか、お互いに要求を出し合うかということだと思います。ソフトをどうするか。それは簡単ではありませんが、私なりに一言で申しますと、「大学らしくない運営」をしたい。大学というのはやっぱり大きな役所なんです。大学でないような、窮屈でない運営をする。それで、先ほどビデオにあったように、皆が楽しむことをやる、さらに「大学らしい」深い教育・研究にも繋げていくという、ちょっと欲張った事を思っています。「角間の里」という建物を使って、大学らしくない運営をするために、私たちはいくつかの具体的な提案を持っています。

そのうちのひとつは、大学だけではなく、学外の方に、もちろん「里山メイト」は学外の方が多いんですが、たくさんの方に研究員になっていただく。「駐村研究員」は、駐在所の駐と村という字を書いていますけども、駐村研究員になっていただいたり、「客員研究員」、「客員調査員」になっていただく。実は明日その第1回の集会をします。今日もたくさんの方が雪の中をおして来ていただいています。そういう方々に私たちはいろいろな事を教えていただく、私たちもいろいろ意見を言う。そういうことをやりながら、大学と地域との里山を通したつながりをより広く、より深くしたい、と考えています。

それから、「角間の里」といういい建物を運営するためには、やっぱりお金もいるわけ

ですね。金沢大学からも文科省からも随分たくさんの支援をいただいておりますが、「大学らしくない運営」をしようと思えば、自分たちでお金を集めたりする必要があります。そのために自主的な運営を目指したい。そうしますと、いろいろな理解のあるユーザー、スポンサーに集まっていただいて、たとえば「里山基金」というものを立ち上げ、それを運営に使っていくことです。それから、大学の中で出来る事は限られてます。ですから、「里山特区」というふうなものを構想しておりまして、今は勉強中です。なかなか出来ないことはいっぱいあると思います。出来ないことを探して、「里山特区」を申請する。そのために石川県の経験豊かな方、金沢市の豊かな方に学ぶ「特区」勉強会を始めています。たとえば、里山教育の特別プログラムを小・中学校にしてもらうとか、大学キャンパス内にどんどん広がっているモウソウ竹、コナラやアベマキをバイオマス利用するような事ができないか。そういうことを含めて、いろんな事を集めて、「里山特区」構想を考えています。先ほど申しましたように、学外の里山研究員、駐村研究員の方に是非、御指導いただいて、進めたいと思っています。

「角間の里」はいろいろな形で使われています。餅つきをしたり、子供たちがたくさん泊まりにきたりしています。春から5000人以上、おそらく、6千、7千人を超えていると思います。ここを拠点として、里山の環境学、つまり里山の森林、生物多様性の研究とか、里山の農林業、地域活性化の研究をしたいと思っています。今までやっていることでは、里山を使った青少年育成もあります。それらの分野は大学だけでは出来ません。金沢大学だけでは出来ませんので、いろいろな大学ともリンクして、この3つの分野についての勉強をさらに深めていきたいと思っています。

石川県の70%くらいを里山が占めております。そこには本当にすばらしい自然、田畑、棚田も広がっています。先ほど河合先生がおっしゃった丹波の森のような人が住んだ里山は石川県でははもっともっと広く広がっています。しかし、現実には先ほど江南先生の話にも少しありましたが、過疎化とか高齢化が進んでいます。それに私たちだけで何かできるわけではありません。しかし、先ほど申しました里山駐村研究員の方々、地域の方々、石川県、金沢市ともいろいろ相談して、教えていただいて、是非このすばらしい石川県の里山を次の世代に残せるようにしたいと思っています。

金沢大学はたくさんの学生を持っており、1年間に1700名入ってきます。しかし、まだまだ学生諸君の参加が少ないのです。それで学生が里山に興味を持ち、この角間だ

けではなしに石川県の能登や加賀の里山に出て行きいろいろな知恵を教えていただく。あるいは龍谷の森へ行って、龍谷の先生方に教えてもらう。そのような交流の場として、里山自然学校、さらに「角間の里」を使った活動をいっそう展開していきたいと思っています。それから石川県には昔トキもコウノトリもいましたが、死に絶えてしまったのです。それを復元するのは簡単ではないと思います。しかし、私たちはいろんな方々と連携して、いろいろな里山活動によって、環境をよくしてゆく。農林業の活性化ということも含めて、石川県の土地が良くなっていく。その中でコウノトリやトキのようなすばらしい鳥が復元するというすばらしい夢をみなさんと一緒に見たいと思っております。どうぞよろしくお願いします。